

# 九条北小学校 校長室だより

N0.27 令和3年11月15日



11月15日（月）、雲一つない秋晴れの中、児童朝会を実施しました。今日は、地震・津波を想定した避難訓練を予定しています。児童朝会でも、それに関連して、「稻むらの火」の話をしました。

## ★「世界津波の日」★

先日、こんな見出しのニュースがありました。「世界津波の日 小学生らが南海トラフ地震を想定して避難訓練 和歌山・広川町」

**平成27年(2015年、今から6年目)12月、国連総会において、毎年11月5日は「世界津波の日」と制定されました。**

この日が「世界津波の日」とされたのは、安政元年（1854年、今から167年前）11月5日、安政南海地震による津波が、いまの和歌山県広川町を襲った時の、地元の豪商・濱口梧陵（はまぐち ごりょう）のある実話にちなんだものです。その実話は、こんなできごとです。

今から167年ほど前のある冬の朝、地震（※安政東海地震とよばれた地震です。全国で2000～3000人がなくなったそうです）が起こりました。いつもと違う海に、村人たちちは津波を心配して神社に避難しましたが、被害がなかったことを喜びあいました。

ところが次の日のお昼過ぎ、あわてて梧陵さんの家にかけ込んできた村人が言いました。「えらいこっちゃ、井戸の水が枯れているぞ！」夕方の4時。きのうの地震とは比べものにならない大きな地震（※この地震はのちに安政南海地震とよばれ、全国で数千人がなくなりました）が起きました。

家の倒れ、かわらが吹き飛びました。ドーンという、大砲がとどろくような音が何度も聞こえ、黒いすじ雲がみるみる広がっていきました。そしてついに大きな津波が押し寄せてきました。「にげろ！丘にあがれ！津波が来たぞ！」梧陵さんは波にのまれながらも必死で村人たちにそう叫んで、神社へと避難を呼びかけました。津波は川をさかのぼって家や田畠を押し流したあと、今度はすごい勢いで海へ引いてきました。

あたりはひどいありさまで、おとなも子どもも家族をさがして呼びまわっています。梧陵さんは、暗やみでどこへ逃げればいいのかわからずさまよっている人がいるにちがいないと考えました。

とつさに、「そうだ。もったいないが、あの丘の稻むらに火をつけよう」と、積み上げられた稲の束に火をつけてまわりました。（当時は、お米はとても大切なものです）すると、逃げおくれた村人が次から次へと火をめざして丘にのぼってくるではありませんか。「ああ助かった、この火のおかげや」村人が避難を終えたそのときです。さらに大きな津波が押しよせて、稻むらの火も波に消されていきました。

地震のあとの炊き出しで、蔵の米もすっかりなくなっていましたが、梧陵さんは家族や店の人に村を守りぬくための協力を求めました。4年がかりで大きく立派な堤防が完成し、海側には松の木を、土手には、はぜの木を植えました。

長い年月がたちました。広村に大波がおそってきましたが、村は堤防のおかげで守られました。大きい地震があったときにも、津波は村に入ってきませんでした。

今も広村堤防は広川町の人びとを守り続けてくれています。

このお話が小説の題材となり、世界中で読まれました。**地震後の津波への警戒や早期避難の重要性、人命救助のための犠牲的精神の發揮を、世界に向かって発信するものとなりました。**